

豊かな対話を拓き、よりよい社会のあり方を 考えあう歴史授業のために

— 大阪市立大学「社会科・地歴科教育法」の取り組み

Naka Yoshinori

花園大学 中 善則

■教職志望の学生に、 この本を届けたい

地歴科及び社会科教員免許取得をめざす学生に、開講時、「歴史学習とは?」と尋ねると、「先生の話が詳しいけど、眠い」、「楽しさはあるが覚えるのが辛い」という風な声になる。そこで、学生と「何のために歴史を学ぶのか」を考え抜くことが講義の目標のひとつとなる。そのためには、学生に一度、本書をくぐらせる必要があると考え、17年度よりテキストとしている。

社会科は、「よりよき社会をつくろうと努力する市民」を育成するものである。憲法や人権思想の理解を土台に、一定の政治的教養や判断力・行動力を、歴史学習を通して獲得させたい。めざすべき歴史授業像は、覚えるべきものを与える授業ではなく、様々な歴史的事象について、関連する資史料を批判的に読み、調べ、他人の意見を聞きとり、未来の社会のあり方を考える授業である。本書は、その資史料のひとつとして、またとないものであると思う。

■「教材」を通して、 「対話」を生み出す授業づくりを

講義では、次のような課題を設定して、本書を活用した。

【本書を活用しての講義テーマ】

2017年度「江戸時代の農民は幸せだったか?」(討論)

2018年度「太平洋戦争」の指導案をつくる(他の教科書と比較して)

2019年度「教材」をつくる(この教科書で授業するとして)

以下、学生の声を記す。

・本文で太文字がないこと、そして資料の数が多く、初めて見る資料ばかりなのが印象的であった。学生同士で行った模擬授業でも、本書の資料から問いを投げかけ

て、資料について全員で考えるというスタイルが多かった。本書は、知識をただ覚えるだけではない、授業で考えるということが重要視されるこれからの教育現場で求められているものだと思う。

- ・特徴的な点は、農民・商人、村・町の様子など、江戸時代の被支配者である「普通の人」の様子に頁を割いていることである。過去に学んだ教科書でも武士以外の人々のことは書かれていたが、頁数としてはかなり少ない印象である。このような農民や商人などの様子に多く注目することは、支配する側以外の視点から歴史をみているということである。ただ武士に支配されて苦しむだけではない人々の姿を学ぶことで、歴史の学習をより豊かなものに行っていると言える。
- ・初めて読んだ時、「これは学ぶ必要があるのだろうか」と思う所があった。しかし、それは、私自身が今までの歴史学習の概念に囚われていたからであった。一度その概念を捨ててみると、面白さに気づいた。本書は「人の目線から書かれているのだ」と感じ、自然と読んでいる人が歴史に寄り添えるような記述の仕方がされていると思った。
- ・従来の教科書が本文→図表という流れで学習されることが多いのに対して、本書は図表→本文という逆のアプローチが可能になるのではないかと感じる。私は社会科の教員を目指しているが、日本史であれば、世界とのつながりや地理的な視点なども意識した授業をしたいと思っている。その意味では、本書は、私の理想とする授業にとっても適したものではないかと感じる。本書を使いこなせる教師になればいいなと思う。
- ・近代の内容、とりわけ二つの世界大戦に関する部分が、他の教科書に比べて圧倒的に充実している。歴史を学ぶことは、過去の成功や過ちを顧み、今のような選択をするべきか考える糧にすること。本書を用いて実際に模擬授業を行うことで、大学生の段階で歴史を学ぶ意義を再考できた。

教職をめざす学生には、将来、生徒と、まず、この本で学び、さらに発展させた教材を準備し、彼らと豊かな対話を拓き、歴史を自分たちなりに捉え、よりよい社会のありかたを夢中で考えあうような授業を、と願う。